

川上村・天狗山と南相木村・栗生川の植物採集

森 泉 恒 男

本会の第125回例会は、昭和63年6月25・26日、長野県南佐久郡川上村原地区の住吉神社内、千曲川（赤顔橋下）、馬越峠から天狗山、更に、南相木村栗生川（上栗生の上）で植物採集会として行われた。

参加者は、中沢袈裟延、今井建樹、宮島芳彦、花里 弘、池田登志男、中山 冽、小林春雄の諸氏と幹事の森泉の総数8名であった。

天狗山（1882 m）は、一名雷山と呼び、川上村と南相木村との界にあり、三国山の支脈西走にあたる。巨大なる岩塊の雲表にそびえる姿は雄大である。

天狗山は、山梨、埼玉、長野県に広がる、南佐久郡の東南に位置する古生層の一大山塊（秩父山塊）からなる。岩石の多くは石灰岩、粘板岩、硬砂岩、角岩などからできている。気候的には、年間雨量は1300 mm、平均気温は8℃で、乾燥した寒さのきびしい内陸性気候を示している。

第1日の25日は、降雨に見舞われ、雨の中での採集となった。住吉神社境内では、オウレンシダ、ミヤマワラビ、クサソテツ、エゾアオイスミレ、ワニグチソウ、カモガヤ、ミヤマエンレイソウ、ヒトリシズカなど樹下にはえる多年草が多く見られた。ハナヒョウタンボク、モイワボダイジュ、キハダ（直径1 m）、ウワミズザクラ、コブシなどの大木を見ることができた。

千曲川にかけてある赤顔橋の下では、バイカモ、オランダガラシなどを見つけた。千曲川にそそいでいる支流は汚染され前述のものは少ない。ヒカゲシラスゲ、エゾムギ、エゾノギシギシ、テキスリなどの草本類が見られた。オノエヤナギ、カワヤナギ、オオバヤナギ、イヌコリヤナギ、バッコウヤナギ、タチヤナギなどヤナギ科のなかまがたくさん見られた。

第2日の26日は、昨日まで降り続いていた雨も上がりはっとした。朝食をすませ、天狗山に向う。馬越峠（1703 m）から尾根までの間に見られた植物はリュウノギク、ヒメスミレサイシン。後者はスミレ科で亜高山帯の針葉樹林の下に生え、本州中部の特産である。ミヤマハンショウヅル、マルバイチャクソウ、ノダケ、ウシノケグサなどの草本類が見られた。さらに、トウゴクミツバツツジ、アイズシモツケ、ベニバナツクバネウツギ、エゾノコリンゴ、

ヤエガワカンバ、ミズナラ、シラカバなどの低木や高木類が多く出現した。

尾根から山頂にかけての道は岩石の露頭がむきだして、急な斜面もあり苦しい歩行になった。尾根道際の高さ90cm前後のナガバノコウヤボウキを見ながら山頂をめざす。ヒメマイヅルソウ、ミツバベンケイ、タカネニガナ、ショウジョウスゲ、キンレイカ、ワラビ、ヤナギタンポポ、ミツバベンケイ、ハガクレスゲ、ハナニガナなどの草本類が見られた。またネズミサンの老木を見ることもできた。コシアブラ、オガラバナ、ネコシデ、コミネカエデ、ヒメウツギ、レンゲツツジ、ウラジロレンゲツツジ、ウラジロハナヒリノキ、ミネザクラ、サビバナナカマド、シモツケ、ミヤマアオダモなどの低木類をみる。

ヒノキの大木はすでに老化しているが、ヒノキの幼木はみられない。どこから来たかまた、だれがもってきて植えたか不思議である。

山頂（1882 m）の南斜面にハコネコメツツジの群落が見られた。心ない人に採集されないところにあるので、たえることはないと思う。

山頂から下るとき、シバ、ヤマドリシダ、オトコヨモギ、なかでもヤマドリシダは多く自生しているのが見られた。

馬越峠付近では、オンダ科のキタノミヤマシダ（ミヤマシダ）の株を見つけた。コンロウソウなどの草本類があった。

南相木村の上栗生の上では、シロバナヘビイチゴ、ラショウモンカズラ、コウライテンナンショウ、ヤグルマソウ、イッポンワラビ、ヤマヒメワラビ、クジャクシダ、ウマノアシガタ、ヒメレンゲなどの草本類、クロカンバ、ユモトマユミ、マタタビ、ニッコウナツグミ、サラサドウダン、ハシドリ、オヒョウなどの木本類が見られた。

前述以外に、アズマシャクナゲ、ウラゲハクサンシャクナゲ、リュウノウイワインチ、ヤマナシ、ウマノミツバ、ミヤマトウキ、ハクモイノデ、ナンブチガイソウ、ウスイキソウ、オサシダ、シラネワラビ、オオキツネヤナギなどが見られた。